

C. S. ルイスのキリスト教的ヴィジョン —*The Screwtape Letters* の場合—

桜井 直美

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Christian World of C. S. Lewis —Mainly on *The Screwtape Letters*—

SAKURAI Naomi

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

C. S. Lewis is well known as the author of *The Chronicles of Narnia*. He also wrote, as a Christian apologist, *Mere Christianity* which is considered to be the most forceful defense of Christianity in the 20th century. One of his apologetic works is *The Screwtape Letters*. *The Screwtape Letters* consists solely of thirty-one letters from Screwtape, a high-ranking devil, to his nephew, Wormwood. Screwtape advises Wormwood how to get a young British man's soul and how to prevent him from being with God. Screwtape also asks Wormwood to manipulate men's thoughts and feelings, driving them to Hell. As these letters are written by Screwtape, a senior devil, the representation of good and evil is reversed, so that readers can observe how the devil's shrewd tricks and clever traps can easily catch many mortals.

In conclusion, I have found that there are some strategies in temptations which lead man to Hell. Temptations are always composed of two things giving illusion of good but in essence being evil, comparing both of them, man tends to choose one or the other of two which is farther away from good.

1. はじめに

C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) は 20 世紀のファンタジー作品を代表する『ナルニア国年代記物語』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-1956) の著者として広く知られ、今もなおその作品は世界中で人気を博している。またルイスはキリスト教の教義を明快に説き、その平易な解説で多くの人びとをキリスト教信仰へと導いた『キリスト教の精髓』(*Mere Christianity*, 1952)の著者でもある。

ルイスの発表した数多くの作品にはキリスト教弁証家としての片鱗が現れており、その中の一つ『悪魔の手紙』(*The Screwtape Letters*, 1942)¹ は、1941

年 5 月 2 日から同年 11 月 28 日にかけて、『ガーディアン』(*The Guardian*)² 紙に連載された 31 通の書簡であり、1942 年 2 月にジェフリー・プレス社より一冊の本にまとめられて公刊された作品である。作品の構成は地獄の高官である老獺な悪魔スクルータイプ (Screwtape) からスクルータイプの甥で一人の青年を誘惑するために地上に遣わされた若い悪魔ワームウッド (Wormwood) への 31 通の手紙よりなっている。悪魔の視点による手紙なので、善と悪の倒置が設えられており、手紙はすべてスクルータイプからワームウッドへ一方通行であるが、その手紙によりワームウッドや被誘惑者である青年の思考や行動の変化が語られる。何度も悪魔の手中に落ちかける

¹ 本稿において『悪魔の手紙』からの引用はすべて、C. S. Lewis, *The Screwtape Letters*, Harper San Francisco, 2000.による。

² 1951 年に廃刊となった宗教新聞。

被誘惑者の青年は、最後に死を迎えた瞬間、悪魔が〈敵〉と呼ぶ神のもとへ向かう。

『悪魔の手紙』は風刺文学として多くの読者を惹きつけた。風刺文学は墮落した世界のヴィジョンの提示であり、嘲笑と非難を通して人間の悪徳を暴露するものである。『悪魔の手紙』において、その攻撃対象はキリスト教徒や傲慢で自己中心的な人間であり、また〈悪魔が偉大な力を持つ〉というロマン派的悪魔観である。風刺が具体化される手段は悪魔の手紙という奇抜な趣向が用いられ、風刺の方法は辛辣なものではなくユーモアを帯びている。そして、風刺の基準はルイスの依拠する〈生一本のキリスト教〉(Mere Christianity)である。

善悪の倒置という技法のために『キリスト教の精髓』とは対極的立場にあるように見える『悪魔の手紙』で、ルイスが読者に示した悪魔の誘惑は真に迫るものである。ルイスは悪魔の巧妙な策略を示したこの作品執筆は最も辛いものだったと述べている。何故なら、ルイスが自己投影しながらスクルータイプを通して語る世界は、埃っぽく、ぎすぎすしており、渴きを覚えるむずがゆいものであり、ルイスの心から、美しさ、爽やかさ、心地よさといったものを一切締め出さなければならなかったからである³。

本論考では、キリスト教との関連を検討しながら、スクルータイプの人間を誘惑する様々巧妙な手口の中で、最も人間が陥りやすい誘惑手法の真髄と誘惑回避の方策を探っていく。

2. C. S. ルイスの悪魔観⁴

ルイスは悪魔を次のように考えている。創造されることのない存在は神のみで、悪魔は永遠に独自に存在する力を持たない。また、あらゆる種類の善きもの、知性、意志、記憶、気力、存在それ自体を取り去ったときに、悪魔は跡形もなくなってしまうので、神の〈完全な善〉に真っ向から対立する〈完全な悪〉に到達することはできない。それ故に、悪魔は決して神と対立するものではない。

悪魔というのは、天使たちの幾人かがその自由意志を乱用することで神の敵となり、また当然の結果として人間の敵になった悪天使である。悪天使は性質において善天使と異なる存在ではなく、悪天使のその性質が墮落しているのである。悪人が善人に対立する存在であるのと同様に、〈悪魔〉は〈天使〉に対立する存在であるにすぎない。したがって、悪魔たちの指導者ないし支配者であるサタンは、神の敵対者ではなく大天使ミカエルの敵対者である。

また、ルイスは人々が漠然と抱く悪魔のイメージについて警告している。人間が悪魔を赤いタイツを身につけた滑稽な姿で想像するときその実在は空疎なものとなり、すっかり油断することになる。一方、ミルトンの『失樂園』(Paradise Lost, 1667)や『復樂園』(Paradise Regained, 1671)に描かれた壮大でロマン派的悪魔が醸し出したイメージ⁵は最も危険だと注意を促している。それらの悪魔は調和を保持しており、調和を保つ為には何がしかの友愛が不可欠となるからである。ルイスは悪魔を自身の体面や栄達のみに関心があり、彼らは不満、永遠に続く嫉妬、傲慢、溢れる憤懣のうちに存在するとし、それ故、そのようなところに調和などもたらされるはずがない⁶と考えるのである。

スクルータイプの本性はワームウッドとの関係の中で明らかにされる。初めは新米の悪魔の甥に最新の誘惑方法を教える叔父らしい優しさが見られ、手紙の最後には'Your affectionate uncle Screwtape'と記している。しかし、スクルータイプはすでに二信目で、ワームウッドの担当する青年がクリスチャンになったことに対して脅迫めいた文面を綴る。四信までにはスクルータイプに苛立ちや憤慨が忍び込み、ワームウッドも叔父の助言に対する批判が生じる。スクルータイプとワームウッドの緊張感が高まるばかりで関係は悪化していく。十九信までにはスクルータイプもワームウッドもお互いに信頼していないことが明らかになる。スクルータイプが何気なく〈敵が人間を愛しているのではないか〉と書いた地獄に

³ Clyde S. Kilby, *The Christian world of C. S. Lewis*, Wm. B. Eerdmans, 1978, p.38.

⁴ ibid. p.43.

⁵ David lyle Jeffrey, *A Dictionary of Biblical Tradition in English Literature*, 1992, p.200.

⁶ Clyde S Kilby, *The Christioan world of C. S. Lewis*. Wm B Eerdmans, 1978, p.44.

おける異端説を取り繕う場面もある。遂に三一信の手紙の最後に 'Your increasingly and ravenously affectionate uncle Screwtape' と記し、スクルータイプは青年を取り逃がしたワームウッドを餌食にすることを暗示している。このように、『悪魔の手紙』では青年を地獄に誘い込むというプロットと平行して二人の悪魔の関係により悪魔の本質が語られるのである⁷。

しかし、ここであえて明確にしなければならないことは、ルイスは『悪魔の手紙』を悪魔について沈黙考するために書いたのではなく、人間の生活を違った角度から光を当てて考察する⁸ためであるということの特記すべきだろう。

3. 巧妙な悪魔の誘惑

悪魔の高官スクルータイプは、研修を終えたばかりの甥の新米の悪魔ワームウッドに、ある青年を墮落させて地獄へ落とす誘惑方法を手紙で知恵を授けるが、青年はワームウッドの働きかけにも関わらずクリスチャンになってしまう。遺憾に思うスクルータイプであるが、絶望するのはまだ早いとワームウッドを励ます。クリスチャンになりたての青年に効き目のある誘惑方法は、青年の関心を信仰の本質よりも教会やそこに集う信者などの付随的な事柄に向けさせ、信仰に対するロマンチックな幻想に水を差すことであるとの指示を与える。

Your patient, thanks to Our Father Below, is a fool. Provided that any of those neighbours sing out of tune, or have boots that squeak, or double chins, or odd clothes, the patient will quite easily believe that their religion must therefore be somehow ridiculous. (p.6)

また、リュウマチで不機嫌な母のために祈る青年の祈りにも誘惑の手が伸びる。

Keep his mind off the most elementary duties by directing it to the most advanced and spiritual ones.

(p.11)

It is, no doubt, impossible to prevent his praying for his mother, but we have means of rending the prayers innocuous. Make sure that they are always very 'spiritual' that he is always concerned with the state of her soul and never with her rheumatism.

(p.12)

要は、青年に魂こそが大切であると思わせ、母親の魂のための祈りを熱心にさせる。そうするうちに〈母親の魂〉と〈リュウマチに苦しむ口うるさく不機嫌な母親〉が別個のものとなり、実在する母親に対して嫌悪を抱くようにさせるのである。

やがて、第二次世界大戦が勃発する。多くの人間を滅ぼすチャンスだとワームウッドは狂喜するが、老獪な叔父はそれを厳しく戒める。戦争のような非常時は、人々に生死の問題を真剣に考えさせてしまい、現世の虚飾に目覚めさせ、忍耐を学ぶ機会を与えてしまうので、悪魔にとって必ずしも有利ではないからである。そのような状況下、悪魔の誘惑方法は明日を思い煩う人間の不安や恐怖心を巧みに利用することである。未来に向けての不安や恐怖は、非現実について考えることなので悪魔に好都合だとスクルータイプは言う。

Biological necessity makes all their passions point in that direction already, so that thought about the Future inflames hope and fear. Also, it is unknown to them, so that in making them think about it we make them of unrealities. (p.76)

人間は未来に目を向けることにより不安や恐怖心が生じて思い煩う。その結果、まだ起こっていないことに対して打ち勝とうとする。スクルータイプが最も困るのは人間が現在だけに関心を向けることである。

... obeying the present voice of conscience, bearing the present cross, receiving the present grace, giving

⁷ Chad Walsh, *The Literary Legacy of C. S. Lewis*, Sheldon Press, 1979, p.26.

⁸ Bruce L. Edwards, *C. S. Lewis life, works and Legacy*, Vol.2, Praeger, 2007, p.178.

thanks for the present pleasure. (p.76)

人間がこのように現在を生きるのなら、悪魔の付け入る隙は無いという。

ほどなく、青年が恋に陥り、しかも相手が熱心なクリスチャンであると聞くと、スクルーティプは激怒し、すかさずワームウッドに恋愛中の男女に付け入る隙を示す。

The human are to be encouraged to regard as the basis for marriage a highly-coloured and distorted version of something the Enemy really promises as its result. (p.96)

悪魔は人間に〈恋愛〉が結婚の唯一の、然るべき根拠であると思わせることに成功した。それにより人間は、結婚が〈恋愛〉という興奮状態を持続させるべきものと考え、その興奮状態が持続しない結婚はもはや拘束力は持たないと考えるようになった。その結果、節制できない人間が解決方法として結婚を考えると〈恋愛〉が伴っていないからという理由で思いとどまることになる。また、性的なぼせあがりにすぎないものでも、結婚を意図しているかぎり、正当性を持つと人間は考えるようになる。このようにスクルーティプは助言する。

だが、青年がクリスチャンの恋人と親しくなるにつれ、彼は自我を捨てはじめ謙虚になる。その結果、彼は他人を思いやるようになり、彼の信仰も深まるのを見ると、スクルーティプは焦りを示し始める。イギリスに戦禍が直接忍び寄る頃、悪魔の誘惑はことごとく失敗し、青年は‘taken out of himself’（自己を脱却する）状態にいる。そのまま青年が死んでしまうと、悪魔の苦労が水の泡になり〈敵〉の手に奪われるので、スクルーティプは青年を死なせないようにとワームウッドに警告する。時をかせぐ間に、青年の臆病心に働きかけ、彼が最悪の事態（死）を免れる為にあれこれ思いを廻らせて、今後も生きながらえていられるという、偽りの希望にしがみつくと助言する。そうすれば自己を脱却した状態から外れ、最後の瞬間が訪れた時に〈敵〉に気づく前に悪魔の手中に落ちるといふ筋書きである。

By building up a series of imaginary expedients to prevent ‘the worst coming to the worst’ you may produce, at that level of his will which he is not aware of, a determination that the worst shall not come to the worst. (p.163)

とうとう青年は爆撃に遭い倒れる。その瞬間に青年は悪魔の手中から逃れて神のもとへ迎えられた。スクルーティプは烈火のごとく怒りワームウッドを非難する。

All the delights of sense, or heart, or intellect, with which you could once have tempted him, even the delights of virtue itself, now seem to him in comparison but as the half nauseous attractions of a raddled harlot would seem to a man. (pp.174-5)

ここにはワームウッドが青年の誘惑に用いた歪曲された善（感覚、心情、知性、美德の歓び）が列挙されている。悪魔は自ら悪を創り出すことができないので、誘惑するために善をねじ曲げて使用する。人間に悪を善と思いこませ続け、少しずつ悪魔の側に引きずり込むのである。怒り狂った叔父の悪魔は甥を餌食にしようと激情にかられて絶叫し、手紙の最後 ‘Your increasingly and ravenously affectionate uncle SCREWTAPE’ の言葉で括られている。

ところで、ルイスは数多く発表したキリスト教弁証作品の中でも度々悪魔を登場させ、人間が神から離れる過程を提示している。ルイスの言うところによれば、人々が信仰への一步を踏み出そうとすると、悪魔は「用心しろ。このよき決断、この恵みを受けることが、どれほどの費用になるものかを考えるがいい」⁹と告げ、二の足を踏ませる。また、ルイスは人間が誘惑に陥る時に、自身が間違った方向へ向かっていると気づかない理由も次のように述べている。「そしてこれが大事なところですが、そういうふうには用心しろと悪魔がわたしたちの耳もとにささやく声は、すべてもっともに聞こえるものです。なるほ

⁹C. S. ルイス、『栄光の重み』、西村徹訳、2004年、p.202。

ど悪魔はたびたび（うんと若い時と違って）まともに嘘をついてわたしたちを欺こうとはしないようです」¹⁰。さらに、既述した要素であるが、善悪の倒置と言う技法により、『悪魔の手紙』と対極的立場にあると考えられる『キリスト教の精髓』においては誘惑の精髓とも考えられる悪魔の手法を次のように明示している。「悪魔はつねに誤りを二つ抱き合わせにして——相対立するものを一組にして、世に送りこむのである。そして彼は、われわれがその二つのどちらがいつそう悪いかを考えて多くの時間を費やすことをつねに助長する。なぜそんなことをするのか——むろんお分かりだろう。彼らは、われわれが一方の誤りを余分に嫌うのを利用して、われわれを少しずつもう一つの誤りの中に引きずりこもうとするのである」¹¹。

Indeed the safest road to Hell is the gradual one——the gentle slope, soft underfoot, without sudden turnings, without milestones, without signposts.
(p.61)

スクルータイプはこの言葉は読者をことのほかぞっとさせるのではないか。

4. 誘惑の回避方法

ルイスは『キリスト教の精髓』の中で七つの(Seven Virtues)について言及し、〈知恵・節制・正義・勇気〉(Prudence, Temperance, Justice, Fortitude)の四つの根源的諸徳と、〈信仰・希望・愛〉(Faith, Hope, Charity)という三つの神学的諸徳に分類している。四つの根源的諸徳についてルイスは、「昔の人たちが試みた分け方」¹²と述べておりプラトンの『国家』に記されるソクラテスが説いた魂の卓越性・善さとしての諸徳を示していると考えられる。三つの神学的諸徳とはキリスト教的徳であり、「それゆえ、信仰と、希望

と、愛、この三つは、いつまでも残る」¹³（「コリントの信徒への手紙一」13：13）に依拠している。これらの徳は悪魔の人間に対する誘惑を阻止するもので、悪魔にとって厄介なものである。その中で誘惑の回避に最も効果的な徳は神学的諸徳の〈愛〉であろう。何故ならスクルータイプは神の愛が理解できないという最大の弱点を曝け出しているからである。ここでは七つの徳の中で〈愛〉に焦点をあて、論を進めることにする。

スクルータイプは〈愛〉について次のように述べ、真に畏れているのである。

One must face the fact that all the talk about His love for men, and His service being perfect freedom, is not (as one would gladly believe) mere propaganda, but an appalling truth. (p.38)

十三信でスクルータイプは、神の人間に対する愛を胡散臭そうに語っている。

He really likes the little vermin, and sets an absurd value on the distinctness of every one of them. When He talks of their losing their selves, He only means abandoning the clamour of self-will; once they have done that, He really gives them back all their personality, and boasts (I am afraid, sincerely) that when they are wholly His they will be more themselves than ever. (p.65)

このように神の愛の形は、人間に切なる求愛はしても無理に奪うことをしないし、人間の個々の本質を大切にす。一方、悪魔は人間を食物とみなして力づくで誘惑しているので、神の愛のもとでは太刀打ちできないのである。

十九信でスクルータイプは、何故〈敵〉が人間を本気で愛するのかを理解できないと述べ、その答えを見つけることが悪魔の最大の課題であるとしている。

¹⁰C. S. ルイス、『栄光の重み』、西村徹訳、2004年、p.198。

¹¹C. S. ルイス、『キリスト教の精髓』、柳生直行訳、新教出版社、2000年、p.282。

¹²C. S. ルイス、『キリスト教の精髓』、柳生直行訳、新教出版社、2000年、p.128。

¹³『聖書』からの引用は新共同訳日本聖書教会からのものとする。

All His talk about Love must be a disguise for something else — He must have some real motive for creating them and talking so much trouble about them. The reason one comes to talk as if He really had this impossible Love is our utter failure to find out that real motive. (p.100)

また悪魔が神の愛を理解できるようになれば、墮落した天使である悪魔が再び天国の住民となれると語り、性質が墮落しているだけで、本当は天国を求めているという仄めかしが悪魔の脆弱さを示している。

Members of His faction have frequently admitted that if ever we came to understand what He means by love, the war would be over and we should re-enter Heaven. And there lies the great task. (p.101)

しかし、あえて言及しなければならない点は、悪魔は先に述べた人間の七つの徳をも巧みな誘惑戦略において駆使するのである。

Well, I am afraid it is no good trying to make him brave. Our research department has not yet discovered (though success is hourly expected) how to produce *any* virtue. This is a serious handicap. To be greatly and effectively wicked a man needs some virtue. What would Attila have been without his courage, or Shylock without self-denial as regards the flesh? But as we cannot supply these qualities ourselves, we can only use them as supplied by the Enemy — and this means leaving Him a kind of foothold in those men whom, otherwise, we have made most securely our own. A very unsatisfactory arrangement, but, I trust, we shall one day learn to do better. (p.159)

以上のように神を真に愛する人間は、すべて神に身を委ねる、つまり自我を脱ぎ捨てることになり、

誘惑の付け入る隙がなくなってしまうのだ。一方、人間に対する神の愛は、人間がどんなに罪深くとも絶対に揺るぎないものであるといえよう。悪魔は神学的徳である愛に翻弄されており、誘惑を回避する方法は、悪魔の曝け出すその弱点によって明瞭に提示されている。しかしスクルータイプの仕掛ける罠はかなり手強く、ここにもルイスの鋭い人間詳察に基づく深知が現れている。

5. 『聖書』的主題との関連

悪魔は『聖書』の表象世界では、神を誹謗して人間を誘惑する超越的存在であり、「創世記」6:1~4と結び付けられて、墮天使たちの首領として宇宙論的な次元を持つ¹⁴。「ペテロの手紙 二」2:4¹⁵には神が罪を犯した天使たちを容赦せず、暗闇という縄で縛り地獄に引渡したとの記述があり、悪魔が墮落した天使とされていることは疑う余地はないであろう。また悪魔は悪霊の頭であり、その支配下で様々な個別の悪霊が働く（「ルカによる福音書」11:14）。

『聖書』に盛り込まれた悪魔の誘惑の枢要な箇所は、「創世記」に記されているアダムとエバの神からの離反であろう。アダムとエバは豊かな実のなるエデンの園に住んでいた。そこにはあらゆる種類の木があり、その中央には善悪の知識の木と呼ばれる木があった。それらの木はすべて食用に適した実をならせたが、神はアダムに対し善悪の知識の実だけは食べてはならないと命令した。ある日、蛇がエバに近づき、善悪の知識の木の実を食べよう唆す。蛇の巧みな誘惑により、とうとうエバはその実を食べた。その後、アダムにもそれを勧め、二人は目が開けて自分達が裸であることに気づき、いちじくの葉で腰を覆ったという罪¹⁶が記された箇所である。

この蛇は「すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇」（「ヨハネの黙

¹⁴ 『岩波キリスト教辞典』大貫隆、名取四郎、宮本久雄、百瀬文晃共編、岩波書店、2008年、pp.16-7。

¹⁵ 『聖書』、新共同訳、日本聖書教会、2006年、(新)p.437。

¹⁶ アダムが神命に背いて犯した人類最初の罪行為であり、人間が皆アダムの子孫としてうまれながらに追う宿罪。（『岩波キリスト教辞典』、前掲書、p.372）。

示録」12:9)と記されているように悪魔を意味する。蛇はその実を食べても「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪をしるものとなることを神はご存知なのだ」(「創世記」3:4)と誘惑する。もはやエバの目に、禁断の実はいかにも美味しそうで、知恵を授かる善い実と映る。自身のみならず側にいたアダムにもその実を食べさせたのである。ここに誘惑の真髄が見られる。悪魔は決して〈神への服従〉に背くようにと直接働きかけはせず、そのことを覆い隠すようにもう一つの善〈知恵を得る〉を差し出すのである。その差し出された善を選ぶがためにエバは罪の意識を持つこともなく、神から離反することになり、期せずして悪魔の手先となりアダムの神からの離脱にも加担することになる。

『悪魔の手紙』のメッセージはイエス・キリストの「種を蒔く人のたとえ」(「マタイによる福音書」13:18-22)に集約されよう¹⁷。「種を蒔く人のたとえ」はイエス・キリストが、湖のほとりで群衆に語った話である。「御国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い取る。石だらけの所に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れるが、自分には根がないので、すぐにつまづいてしまう人である。茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞くが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である」¹⁸と譬えた。蒔く人は神であり、種は人間と解釈される。ルイスは『悪魔の手紙』の中で〈悪い者〉、〈根の張れない岩場〉、〈日の差さない茨の中〉を見事に悪魔の誘惑として描いている。

スクルータイプは『聖書』を次のように記している。

On shabby little book containing corrupt texts of a number of religious lyrics, mostly bad, and in very small print. (p.6)

この一文はユーモア溢れる風刺作品の骨頂である

¹⁷ Clyde S. Kilby, *Images of Salvation in the Fiction of C. S. Lewis*, Harold Shaw, 1978, p.74.

¹⁸ 『聖書』、前掲書、新訳 p.25 参照。

う。興味深いことにスクルータイプは『聖書』を良く知っており、ワームウッドに聖句、放蕩息子の兄(「ルカによる福音書」15:11-24)のことに気をつけるように助言する箇所もある。

Remember the elder brother in the Enemy's story?
(p.14)

このように『悪魔の手紙』はキリスト教弁証家としてのルイスにおいては当然のことながら、『聖書』的主題と深く関わりを持っているのである。

6. 結論

以上ここまで見てきたことから、キリスト教の教義において悪魔の誘惑というかたちで、人間が神から離反することが述べられていることが明らかになった。その中で人間に誘惑が忍び込む時には、二つの事柄を抱き合わせにしてもたらされるという特徴が見られる。『悪魔の手紙』の中で示した青年の祈りの時には、〈母親の世話をするという基本的な義務を果たす〉ということと〈同居している母親(魂)のために祈る〉という二つの事柄のうち青年は母親の魂のために祈るほうを選ぶ。また、〈未来の非現実を慮る〉ために〈現在を受け入れる〉ことから目を逸らす。あるいは〈恋愛感情があるので結婚をする〉ために〈結婚により愛情を深める〉努力を怠る。さらに『聖書』の中のエバは〈知恵を得る〉ために〈神の命令〉に背いてしまう。このように、一見すると選んだ方は善きものと思いきや、人間は悪へ向かうときに罪悪感を持つことすらない場合があるのである。

悪魔は神と対立するものではなく、神に背き善から離脱したものであることと同様に、悪は善と対立するものではない。つまり神へ向かう善を押し留め、阻止する力が悪なのである。その行いは殺人など特別な悪事である必要はない。スクルータイプの攻撃は人々の日常の隙をついて悪へと導くものであり、その画策は明解で、些細な日常の選択が天国、もしくは地獄に繋がるというものである。それらの選択が〈神の愛〉に基づくものであれば悪魔の誘惑を回避し天国に導かれ、〈自我〉に依拠するものであれば

地獄に繋がるといえよう。

最後に付言しておくべきこととして、『悪魔の手紙』を研究する過程で、次のような興味深い事象を見出した。それは悪との関係を断ち切りがたいルイスの苦悩が『悪魔の手紙』The Screwtape Letters に内在しているというヒントのように作品名の中にルイスのミドルネームが盛り込まれていることである。すなわちルイスの姓名 Clive Staples Lewis の中に、数文字を括弧内に補うと、S(crew)tap(e)le(tter)s となり、Screwtape および Screwtape Letters という言葉が浮かび上がってくることである。これは単なる偶然ではないと筆者には思われるのである。

(Received:December 31,2009)

(Issued in internet Edition:February 8,2010)